

ニュースレター

# いりおもての森から

発行：林野庁 九州森林管理局 西表森林生態系保全センター

沖縄県石垣市字登野城55-4 石垣地方合同庁舎 1階

TEL 0980-88-0747

No.69号

さらなる飛躍の年に！

## ～令和6年度のセンター業務を振り返って～

令和6年度は、新型コロナウイルスの影響が和らぎ、西表島にも国内外から多くの観光客が訪れるようになりました。この様な中で今年度の業務を振り返り、大きく三点取り上げます。

一点目は、国際協力機構（JICA）課題別研修の受入れです。当センターでは、これまで北海道センター（帯広）並びに沖縄国際センターからの講義依頼を受け研修を行っていますが、今年度はこの2つのセンターに加え、モーリシャス国から受入れ依頼もあり、12カ国 24人の研修員が訪れました。

講義内容については過去のトピックスでもお知らせしましたが（「日本の森林や森林管理」、「西表島の森林と森林利用」、「西表島のマングローブ」、「西表森林生態系保全センターの業務」の4つのコンテンツ）で、通訳を介し約3時間講義を行いました。JICA 北海道センターの講義では翌日に西表島へ移動し、実際にマングローブを直接感じてもらう予定でしたが、台風の影響により船が欠航となり、行程の変更を余儀なくされましたが、西表島と石垣島のみ自生地があり石垣島北部に自生する希少な「米原のヤエヤマヤシ群落」（天然記念物）を見学することが出来ました（写真1）。

この研修を通じて学ばれたことを、それぞれの国で現存する問題の解決に向けて取り組まれることを期待するとともに次年度以降も協力して参ります。



（写真1）米原ヤエヤマヤシ群落と研修員（JICA 北海道センター）

二点目は、地元中学校（大原中）の三大行事「西表横断」の支援です。当センターでは森林環境教育の一環として地元の小中学校が西表島の自然を身近に体験することで自然の大切さや素晴らしさを実感するための催しを支援しています。三大行事はそれぞれ3年ごとに1回実施され、生徒は在学中の3年間で三大行事全てに参加することとなっており、今年は「西表島横断」を行いました。朝から雨が降ったり止んだり、少し肌寒く感じ、スタート地点の軍艦岩から、ゴール地点の大富口まで約12.2kmの険しい道のりの西表島横断を行い、私自身も初めての体験であり、体力的には多少自信はあったものの不安ではありましたが約8時間をかけ無事横断し安堵したところです（写真2）。

西表森林生態系保全センターでは、西表島の自然環境教育にかかる地元小中学校の行事をこれからも支援していきますので、是非お声がけ下さい。

三点目はキャリア実習です。夏休みを利用し応募のあった大学生1名を受入れ、当センターで実施している各種モニタリング調査や外来種駆除など実際に体験してもらいました（写真3）。8月ということもあり現場は30℃超えの気温の中、普段と違う環境に苦戦しながらも積極的に物事に取り組む姿勢を見て、我々の方が学ぶことが多かったように思えた3日間でした。当センターの業務は森林管理署の業務とは異なりますが、今後も多くの学生に当センターで取り組んでいる業務や西表島の素晴らしさを体験していただきたいと思っています。

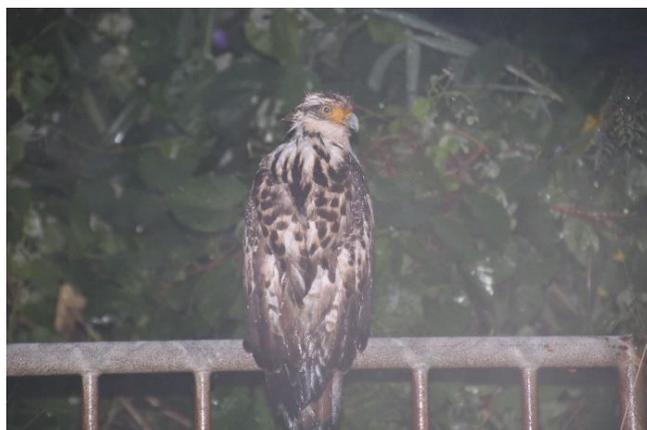
最後に、この紙面で紹介できなかった多くの業務については、当センターのトピックスをご覧くださいければ幸いです。一年あつという間に過ごしてきましたが、西表島の偉大な自然や生物多様性の保全業務に直接携われたことに感謝するとともに、さらに令和7年度の西表森林生態系保全センターの活動が飛躍できるよう安全第一で各種業務に邁進します（写真4）。



（写真2）全員で記念撮影（大原中3大行事・西表横断）



（写真3）ヒナイ川で入込調査をする実習生



（写真4）天然記念物に指定されているカムムリワシ  
（県道沿いで撮影）

10年に1度の調査へ！

## ～ 星立ヤエヤマヤシの調査を実施 ～

西表島北西部の星立天然保護区域に自生するヤエヤマヤシ (*Satakentia liukuensis*) は西表島の「ウブンドルのヤエヤマヤシ」、石垣島の「米原のヤエヤマヤシ」とともに国指定の天然記念物に指定されています。このヤエヤマヤシは西表島と石垣島に生育する1属1種の固有種であり、環境省の準絶滅危惧種に指定され、将来的に絶滅する危険性があると判断されています(写真5)。

当センターでは、平成26(2014)年度に星立ヤエヤマヤシの調査を実施しており、今年度、10年経過後の現況を把握するため調査を行いました。

平成26(2014)年度の調査では、自生しているヤエヤマヤシの成木(胸高部1.2m地点が木質化しているもの)全てを対象に、胸高直径と樹高を計測し位置情報を取得しましたが、今回は、事前に自生区域の表示を行い、その後、総本数と生長プロット内の調査を行いました。

総本数は、ヤエヤマヤシの個体数を把握するため、成木(胸高部1.2m地点が木質化しているもの)全てについて本数と位置情報を調査しました。

生長プロットの調査は、今年度新たに設定したものでヤエヤマヤシの生育状況の可視化を目的に、成木は単木毎に番号票を付して胸高直径、樹高、位置情報を調査し、稚樹と幼木については、樹高ごとに区分し本数を調査しました(写真6)。

調査の結果、ヤエヤマヤシの総本数は1,371本で、前回調査値と比較し610本増となり、区域面積は、0.25ha増加し2.70haとなりました。

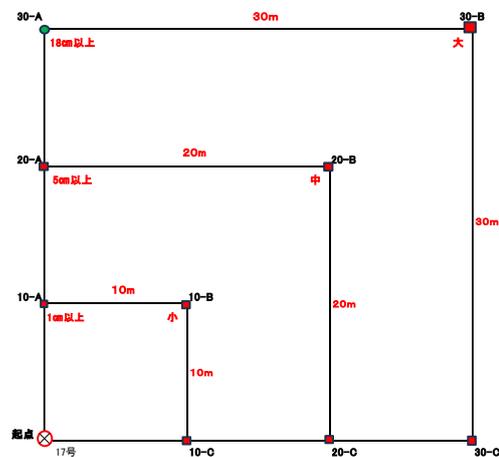
今年度新たに設定した生長プロット(図1)では、成木が82本で、最大胸高直径が33.8cm、最大樹高は18.3mとなり(表1)、稚樹と幼木の調査では稚樹の発生数が全体の約7割を占め、幼木は樹高の伸びに伴い生育本数が横ばいとなっています(グラフ1)。



(写真5) 星立天然保護区の遠望



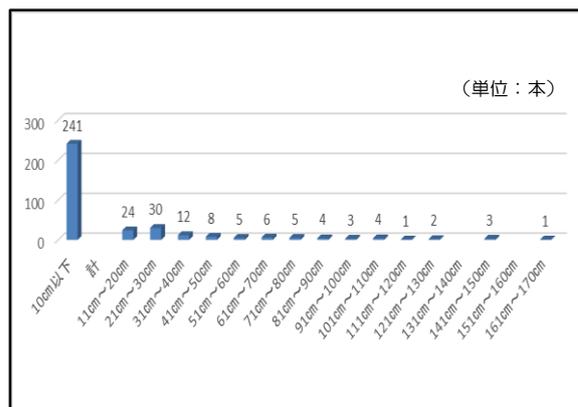
(写真6) ヤエヤマヤシの測定方法



(図1) 生長プロット設定図

総本数	82 本
平均胸高直径	23.3 cm
最大胸高直径	33.8 cm
最小胸高直径	11.6 cm
平均樹高	8.1 m
最大樹高	18.3 m
最小樹高	1.8 m

(表1) R6 調査値 (生長プロット)



(グラフ1) 稚樹と幼木の発生本数

平成26年度調査から10年が経過し調査を実施しましたが、林分内には台風時等による強風が影響したと思われる欠頂木や倒木等が確認され、一方で成木に満たない幼木も多く見られ、成木本数や区域面積の増加により、良好に天然更新が行われていることが確認できました。5年後に今回設定した生長プロット内の調査を実施することで、成木の生長状況や幼木・稚樹の更新状況が明瞭化できるものと考えています。

今回の調査では成木数が増加し、幼木や稚樹も多く確認できたことから、星立天然保護区内のヤエヤマシについては良好な状態が維持されているものと考えられます(写真7、8)。

西表島は世界自然遺産に登録され益々国民の自然に対する意識や期待が高まるものと考えています。希少な植物群落を良好な状態で保全管理できるよう、今後ともセンター職員一同取り組んでいきたいと考えています。



(写真7) 成木の生育状況



(写真8) 稚樹の発生状況

自然環境教育の一環として！

## ～ 大原中学校三大行事「西表島横断」を支援 ～

当センターでは自然環境教育推進の一環として西表島にある大原中学校及び船浦中学校の伝統である三大行事を支援しています。三大行事は大原中学校が「西表島横断・古見岳登山・仲間川筏下り」で、船浦中学校が「西表島横断・テドウ山登山・浦内川筏下り」です。三大行事はそれぞれ3年に1回実施され、生徒は中学校を卒業して西表島を離れるまでに三大行事全てに参加することとなっています。

今年は「西表島横断」の年です。「西表島横断」は先に述べた通り大原中学校と船浦中学校に共通する三大行事で、両校が合同で実施することはありませんが、歩くルートは全く同じです。例年通りであれば、両校とも実施する予定でしたが、今年は船浦中学校が生徒の提案により「西表島横断」に替わる新規の三大行事を実施したため、大原中学校のみ実施することとなりました。

大原中学校の「西表島横断」は、(1)郷土理解を図り、たくましく生きる知・徳・体を身につける。(2)地域の人材と連携し、学校と地域で行事を創り上げる。(3)生徒、教師、地域の方がお互いに協力し合い、協調性をやしなう。(4)西表島の自然の素晴らしさを直接肌で感じさせることにより、自然への畏敬の念や保護する心を育てる。この4点を目的として実施されています。

11月26日(火)に教職員及び地元ガイド、保護者等の関係者有志による本番前の事前踏査が実施され、当センター職員2名と大原森林事務所地域技術官及び沖縄森林管理署職員1名の計4名が参加しました。事前踏査では足場の悪い箇所へのロープの設置や倒木等の除去を実施し、生徒たちが安全に横断できるよう整備を行いました。

午前8時に軍艦岩を出発し雨で足元がぬかるむ中での作業となりましたが、チェーンソー等を担いで横断道を突き進む地元ガイドの方々の体力、歩行速度に驚かされ、体力的に不安はありましたが何とか無事にゴールである大富口に午後6時に到着することができました。

12月6日(金)に大原中学校にて教職員及び保護者、地元ガイド、関係機関等を交えた事前の打合せが行われ、当センター主事及び大原森林事務所地域技術官の計2名で参加しました。打ち合わせでは当日のスケジュール、班編成、横断にあたっての注意点等を共有した後、打ち合わせに参加したメンバーそれぞれの自己紹介を行い、1週間後の横断に向け団結を強めました。

12月13日(金)当日は、沖縄森林管理署本署職員4名と大原森林事務所地域技術官及び当センター職員4名の計9名で参加し、生徒、教職員、保護者、地元ガイド、支援機関総勢87名が6班に分かれて西表島横断となりました。我々林野庁職員は1班に1名、3～6班に各2名の配置となりました。

朝から雨が降ったり止んだり、少し肌寒く感じ、朝7時に浦内川河口の駐車場に集合、全体写真の撮影と出発集会を行い、遊覧船に乗ってスタート地点の軍艦岩へと向かいました(写真9)。



(写真9) 大粒の雨の中、遊覧船で出発

軍艦岩には7時50分頃に到着し、ゴールの大富口まで約12.2kmの険しい道のりの西表島横断がスタートしました(写真10)。

カンピレー口までは比較的歩きやすい道が続きますが、いざ横断道に入ると徐々に道が険しくなり、ターニングポイントであるイタジキ川には11時頃に到着しました。

昼食をとり、引き続き横断する人と引き返す人に分かれますが、イタジキ川の先はより険しい道で、引き返すことが困難となるため、慎重に各自の体力と相談し進退の判断を行い、ほとんどの生徒がイタジキ川を渡り、大富口へ向かって歩を進めました(写真11、12、13、14)。



(写真10) いざ西表島横断へ



(写真11) イタジキ川沿いで昼食



(写真12) カンピレーの滝



(写真13) 激流のイタジキ川を渡る



(写真14) 中間広場で一休み

道中は皆で声を出し、互いに励ましあいながら和気藹々とした雰囲気で行き、アップダウンが激しく、ロープに頼らなければ進めない箇所もあるなど険しい道のりで、かつ、雨で足元がぬかるみ滑りやすいという悪条件ではありましたが、全員午後5時までには無事ゴールにたどり着くことができました。イタジキ川を渡る前は不安げな表情だった生徒たちですが、進むにつれて表情が明るくなり、ゴールする頃には皆笑顔になっていました（写真15）。

大富口から下ったあとは中学校近隣にある「大富公民館」にて、保護者や校長先生から労いの言葉とともにお手製の八重山そばとおにぎりが振舞われました。その後、午後7時ごろから解散集会が行われ、各班の代表が横断の感想や保護者や関係者への感謝を述べたのち、PTA 会長と校長先生から言葉をいただき、今年の「西表島横断」は終了となりました（写真16）。

西表森林生態系保全センターでは、西表島の自然環境教育にかかる地元小中学校の行事をこれからも支援していきますので、是非お声がけ下さい。



（写真15）ゴール間近、最後の休憩



（写真16）解散集会にて横断の感想を述べる生徒

## 西表島の樹木いろは①



アテク (フトモモ科)

（出典…西表島の植物誌）

低地から山地の林内に生育する常緑の小高木です。木の皮は赤褐色で全体に毛はありません。小枝は細く四角形です。葉は対生、革質で楕円形〜長楕円形です。小さな花が集まって咲きます。実は液果で球形、紫褐色に熟します。

【アテク】

## 『森の巨人たち百選』

# ～ウラタ川のオヒルギ樹木医診断を実施～

林野庁では平成 12 年（2000 年）に、全国の国有林内に生育する巨樹・巨木を国有林野の財産として将来にわたって保全することを目的に、各地の代表的な巨樹・巨木を「森の巨人たち百選」として選定しています。九州森林管理局内では当初、屋久島の縄文杉や福岡の大王杉など 20 本の巨樹・巨木が選定されていましたが、枯死等により現在 17 本の生育が確認されています。

西表島の国有林内においては「仲間川のサキシマスオウノキ」と「ウタラ川のオヒルギ」の 2 本が登録されており、当センターでは平成 17 年（2005 年）から毎年、両巨木の生育状況を確認するため、樹高及び胸高直径等

の生育具合や周囲の植物の発生状況、林内の光環境及び地盤高変位を調査し、その調査結果を「西表島巨樹・巨木保全協議会」（以下保全協議会）に報告することとしています。

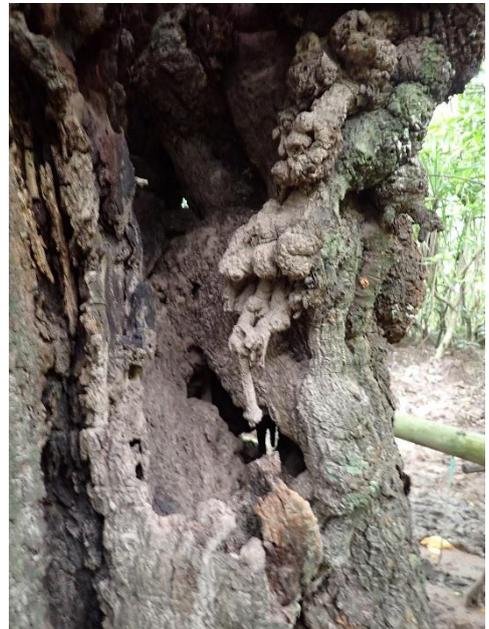
しかし、「ウタラ川のオヒルギ」（写真 17）については近年の調査において、オキナワアナジャコによるシャコ塚やオヒルギの空洞部に詰めた充填物などが影響し、樹幹内の腐朽が著しく進行しており（写真 18）、年々樹勢の衰退が確認されたため保全協議会内で報告を行い、令和 6 年 9 月 28 日に日本樹木医会沖縄県支部長の生沢先生、琉球大学農学部教授の谷口先生、元森林協会常務理事の具志堅先生、以上樹木医 3 名による診断が行われました。

樹木医の先生方の最初の所見として「少し危ない状況かもしれない」との話があり、緊張が走る中オヒルギの診断が開始されましたが、専門的な知識や道具を用いて診断が進められ、樹勢の弱まった原因や周囲の環境、土壌の状態や樹勢回復を促す方法など、オヒルギの現状と今後の対策について説明いただきました（写真 19）。特に今後の対策として不定根（地面に根を張っていない成長段階の木根の名称）（写真 20）の話があり、「不定根こそがオヒルギがまだ生きている証明でもあり、樹勢回復のきっかけでもあるため、確実に不定根の保護措置を図るべき」との見解を示されました。

今回の診断結果については後日保全協議会で報告され、今後の対策について検討が進んでいくこととなりますが、巨木オヒルギは老齢木であることから、保全対策においても慎重な措置が求められると考えています。先生方が診断されている途中に地元ガイドの方がカヤックで通られお話を伺った際にも、年々樹勢が弱まるオヒルギを憂いている様子で、島民に昔から愛されている樹木であることが感じられました。当センターとしても、今後もウタラ川のオヒルギの樹勢をはじめ生育環境の変化や周囲の環境を注視し、保全活動に努めてまいります。



（写真 17）ウタラ川のオヒルギ（保全措置の木枠）



（写真 18）内部が腐朽し、空洞となっている



(写真19) 説明中の様子  
琉球大学農学部教授 谷口先生（左側）  
元森林協会常務理事 具志堅先生（中央）



(写真20) 空洞部から根を伸ばす不定根

## 平成17年から続いた入込調査

# ～ヒナイ川・西田川の利用状況調査（入込調査）の終了～

当センターでは西表島の国有林の利用状況を把握するため、平成17年8月からヒナイ川では毎月、西田川では2か月に1度の利用状況調査（入込調査）を行っており、調査結果については、毎回調査後に当センターホームページのトピックスにて報告してきました。また、1年間の調査結果のとりまとめについては年報にて報告してきました。

平成17年8月から令和6年12月までにヒナイ川では232回、西田川では123回の調査を実施しました。

これまでの調査の結果ですが、ヒナイ川については聞き取りを行ったツアーの総数は2,919組、確認した観光客の総数は10,954名、確認したカヌーの総数は10,631艇でした。

ヒナイ川はどの時期も観光客が入っており、夏休み期間中や修学旅行等で観光客が多い時期にはカヌーで川の水面が見えなくなるほどでした。最もツアー数が多かったのは平成29年度8月調査の34組、最も観光客数が多かったのは平成20年度9月調査の152名、最もカヌーの数が多かったのは平成21年度8月調査の139艇でした。

西田川で聞き取りを行ったツアーの総数は220組、確認した観光客の総数は1,075名、確認したカヌーの総数は831艇でした。

西田川は観光客がまばらで、入込調査の際に誰も訪れないこともあり、特に冬から春先にかけてはその傾向が顕著でした。最もツアー数が多かったのは平成28年度8月調査の7組、最も観光客数が多かったのは平成25年度8月調査の40名、最もカヌーの数が多かったのが平成20年度8月調査の27艇でした。



(写真21) ヒナイサーラの滝



(写真22) サンガラの滝



(写真23) ピナイサーラの滝上より

令和6年8月にヒナイ川エリア及び西田川エリアが特定自然観光資源に指定されたことに伴い、令和7年3月1日から利用人数制限（ヒナイ川：200人/日、西田川：100人/日）が設けられることになりました。特定自然観光資源に指定されたエリアに立ち入る際には竹富町への事前申請が必要となり、事前申請により利用状況がより正確に把握されることから、令和6年度をもって入込調査を終了することとしました。

ヒナイ川・西田川での入込調査は終了しますが、今後も地域と連携しながら西表島の貴重な自然環境の保全に努めたいと思います（写真21、22、23）。これまでヒナイ川・西田川の入込調査にご協力いただきました西表島カヌー組合所属のガイドの皆様へこの場を借りて御礼申し上げます。

## 西表島の樹木いろは②



アミガサギリ(トウダイクサ科)

(出典：西表島の植物誌)

低地の荒地などに生育し落葉する低木です。葉はハート型で縁には浅く細かな鋸歯があり、葉の裏は白みがかった緑色で両面とも無毛です。葉の基部には蜜を出すところが2個あります。雌雄異株まれに同株。

【アミガサギリ】

## 西表森林生態系保全センターからのお知らせ

※ホームページではニュースレターのバックナンバーが確認できます。また日々の活動報告などのトピックスも随時更新しています。

[https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/iriomote\\_fc/](https://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/iriomote_fc/)

